「地獄の配膳」

大庭　みな子

　敗戦の夏、わたしは十四歳だった。広島市から二十キロ余り東にある、西条という町にいた。賀茂鶴というお酒できる。水の美しい、合歓（ねむ）の花が霧の中で咲く盆地である。

　その前年、女学校二年生のとき、わたしは愛知県からこの町にやって来たのだが、その頃はもう広島と呉は連日空襲を受けるようになった。両親は最初、わたしを広島の女学校へ転向させようとしたが、思い直して町の小さな県立の女学校に入れた。お陰でわたしは命拾いをした。もし広島の女学校に通っていたら、八月六日の原爆でわたしは死んでいただろう。わたしと同じ学年の広島の女学校の生徒は、ほとんど全員死んだという話を後になって聞いた。一、二パーセント助かったのは、丁度そのとき、学校を欠席していた者か、何かの都合で学校にいなかった者だけなのだ。原爆が落とされたのは八時十五分だったから、全校の生徒が、朝礼で校庭に集合していたときなのだ。爆心地で、あの死の光を真上から受けたのである。

　敗戦後間もなく、八月の末から九月にかけて、県下の女学生たちは、原爆後の救援に動員された。二、三十人のわたしたちの班が配属されたのは太田川のほとりにある小学校で、鉄筋のなかなか立派な校舎だったが、行ったときは窓ガラスは一枚もなく、吹き曝（さら）しの鉄骨とくずれた壁だけの残骸であった。そのとき広島市は見渡す限り瓦礫（がれき）の原で、文字通り市街は壊滅の状態だったから、ともかくも、形骸をとどめている建物というだけでも貴重な避難所だったのだ。第〇〇収容所と称して、引取手のない三百人余りの原爆の患者たちが収容されていて、その世話がわたしたちの仕事だった。

　わたしたちは、雨風の吹き込む教室の一つに雑魚寝（ざこね）して、毎日患者たちのために、校庭で三度の食事をつくるのだった。風呂桶のような大きな鉄の鍋の下に火をたき、雑炊（ぞうすい）を煮るのである。じゃがいもやかぼちゃなどを入れ、米を放りこんで何時間もぐつぐつと煮て、それをバケツに入れて、患者たちの間を縫いながら柄杓（ひしゃく）で一杯ずつ配った。

　床に投げ出されてひしめき合っている被爆者たちの形相（ぎょうそう）は、此の世のものではなかった。睫毛（まつげ）は焼け落ち、髪の毛はなく、皮膚は赤むけで、えぐれた火傷（やけど）には、無数の蠅（はえ）と蛆（うじ）がうごめいていた。生きている者と死んでいるものの見分けがつかない凄惨さであった。

　糞尿にまみれてうずくまっている人間たちのほとんどは、声も立てなかったが、ときどきわけのわからないことを喚（わめ）き、腕を振りまわして蠅を追う者もいた。頭のおかしくなっている者も大分いた。比較的軽傷な者でも、這（は）いずりまわっている怪物という感じだった。そういう三百人の患者の間を縫って、わたしたちは黙々とバケツで雑炊を配って歩いた。

　朝の食事のとき生きていた者が、昼食を配るときはもう死んでいるというようなことが連日あった。三百人の収容患者のうち、平均、日に五、六人から十人近くが息をひきとった。死体は校庭の隅に掘ってある大きな穴に放りこんで火をかけた。雑炊を

炊く釜の火と並んで、雨の中でいつも二つの煙がいぶっていた。
　食事を配るたびに、わたしは心の中で、今度はどの患者がことときれているだろう、ということをぼんやりと考えていた。だが、いったいどうすることができるというのだろう。
　わたしたちにできることは、数滴の水を、蛆の這う唇に流し込んでやることだけだった。それさえも幼い女学生の多くは脅えきって「みずう、みずう」と叫ぶ患者につかまると、幽霊の喚く土饅頭（どまんじゅう）の前に水を放り出すようにして逃げてくるのだった。
　わたしが唇の中に水を注いでやった老婆は、糞尿にまみれたござの下から財布をひきずり出して、わたしに寄越（よこ）そうとした。わたしが首を振って立ち去ろうとすると「あ、あんた、どうか、蠅を、蠅を追っておくれんさい」と赤むけの顔をひきつらせて喘（あえ）いだ。
　瞼（まぶた）のふちにも鼻の穴にも唇にも蛆を這わせた老婆がわずかに身をもがくと、蠅はのろのろと彼女の皮膚から飛びあがり、再びゆっくりとそのぬめった皮膚の上に舞いおりた。
　「どうか、どうか、このござをひきずって、あの雨の降る中に出しておくれんさい。雨にあたれば少しは、少しは …… 金はみんなあげる。財布ごと」
　まわりの患者たちは無表情に老婆を眺め、蠅の中で寝返りを打った。一時間後、この老婆は死んでいた。
　わたしたちにできることはただ雑炊を炊くことと、配ることだけであった。わたしたちが米をとぐのは、水道の管が切れて流れっぱなしになっている瓦礫の間だったが、まわりには一面、白骨が散らばっていた。指の骨、脚の骨、肋骨などがあった。骨の間に水が流れ、こぼれた米粒や馬鈴薯（ばれいしょ）の皮が流れた。
　ここに収容されていた患者のほとんど全員が、遅かれ早かれ死んだのではないかと思う。わたしたちの仕事は地獄の中の配膳作業であった。
　教室の一つには医師と看護婦がいて、連日つめかける被爆者たちを看（み）ていたが、彼等とていったい何ができたというのだろう。薬品といえばマーキュロチンキとオキシフルぐらいのものだった。歩いてやってきて、列をつくって待つほどの体力のある患者をさばくだけがせいいっぱいだった。絶対に助かる見込みのない、蠅の中でまだうごめいている人間からは、ただ顔をそむけて立ち去るしかなかったのである。
　その頃、米軍が東京に進駐した、と新聞は報道した。人々はこの地獄の絵図をくりひろげた原爆について、まだ何も知らなかった。これが日本の敗戦を決定した怖ろしい新兵器だということだけが囁（ささや）かれ、この爆弾による火傷がただの火傷ではないということだけが、現在の事実から得た判断であった。
　二百十日（にひゃくとうか）がやってきて、連日雨と風が吹き荒れた。街は水浸しになり、赤痢が発生した。そしてまた更に多くの人間が死んだ。雨の中で雑炊の鍋の下の火は燃えず、わたしたちは煙にいぶされて、目を真っ赤に泣き腫（は）らした。死体もまだ焼けきらないうちに火が消えた。
　赤痢の発生で集団の罹病（りびょう）が気づかわれて、女学生は動員を解除された。わたしたちは広島駅のホームに着いた汽車の窓から荷物のように車輛の中にほうり

こまれて、西条に送り帰らされたのである。
　十四歳の夏、わたしはものを言わなくなった。そしてこの夏の記憶はわたしの生涯を大きく変えた。歩き始めると、甦（よみがえ）るこの記憶はわたしを立ち止まらせ、人間というものを考え直させる人骨の杭（くい）となった。

◆「合歓の花」
　合歓木（ネムノキ）は、この植物が夜になるとゆっくりと葉を閉じることから「眠りの木（ねむりのき）」が転訛して、ネムノキになったといわれる。
◆「当時 14 歳」
　当時の高等女学校は尋常小学校（国民学校）を卒業した後、12 歳で入学。当初在学期間は５年間であった、戦況悪化にともない４年に短縮された。３年生になると陸軍被服支廠の学校工場（女学校の校舎が縫製工場）での勤労に従事。４年生は寄宿舎生活をし、度重なる空襲に怯えながら呉市の広にあった第 11 海軍航空廠で航空機部品の製造・研磨作業に従事した。
◆「愛知県から」
　1944（昭和 19）年４月に愛知県立豊橋高等女学校から転入学。1946（昭和 21）年３月に山口県立岩国高等女学校へ転出。
◆「太田川のほとりにある小学校」
　広島市立本川国民学校（現在の本川小学校で爆心地に最も近い学校）。その他、広島逓信病院、広島第一国民学校及び大河国民学校の４カ所で活動。
◆「土饅頭」
　遺体や遺骨を葬ってある所
◆「二百十日」
　立春を起算日として 210 日目（立春の 209 日後の日）で、日付ではおよそ９月１日ごろ。台風の多い日といわれるが、必ずしも事実ではない。1945（昭和 20）年は９月 17 日に枕崎台風が上陸。原爆で壊滅的な被害を受けた広島市にとって追い打ちとなった。広島県の台風による死者数は 2012 名で、衛生状態も悪く伝染病の赤痢がまん延したといわれている。大庭のエッセイから判断すれば、８月 17 日から開始された賀茂高等女学校生徒の救護応援活動は、何度かの交替をしながら１カ月近く続いたと考えられる。
◆「赤痢」
　赤痢は、下痢・発熱・血便・腹痛などをともなう大腸感染症。俳句では夏の季語として扱われる。